龍ノ口落城記

解題

龍口落城記　一卷

著者　未詳

此書は、備前上道郡龍口山落城の顚末を記せるものなり。卷末に記す所に據れば、この原本は、もと和田村の庄官某が家にありしを、文辞組笨にして字義亦誤謬多かりしを以つて、元祿元年の春某氏これを求め、記寫の序に潤色して、此書を成せしといふを見れば、此書の既に元祿以前の編著に係りしを知るべし。

本書もと池田侯爵家所藏土肥秘函の中に收められたりしを以つて、此書恐らく土肥經平の校訂に係りしものと思いしに、經平は寶永四年に生れて、天明四年に歿したれば、經平の校訂にあらざることは云ふ迄もなし。今回刊行せる底本には、卷末に明和元年書寫とあり。思ふに經平の子延平の書寫に係りしものか。

龍口落城に關しては、異說紛々たり。本書記する所は、宇喜多戰記と異なりて、備前軍記とその說を同うす。備前軍記は經平の著なれば、云ふ迄なく經平は宇喜多戰記を取らずして、この說を取れるを知るべし。

龍ノ口落城記

著者　未詳

抑々、備前國上道郡龍口城主穭所修理亮元常滅亡の謂を委く尋るに、永祿元龜の比とよ、宇喜多和泉守直家未だ備前一統平治せざる前、岡山の城主金光備前守を討て、其舊壘を造作して、勢既に浦上宗景を押す。宗景の長臣の多くは直家に與して、武威國中を靡かすといへども、穭所修理亮龍ノ口の城を守て、敢て宇喜多に從はず。直家大に怒て猶子與太郎基家を大將として、長船紀伊守・延原土佐守に命じて、是を攻めんとすれば、元常城山の麓段の原に討て出で、竹田河原の北に會戰して、自身陣頭に馬を進め、手を碎きて相支へ、機に臨み變に應じて戰ひしかば、長船・延原紛々と鬪亂して、竹田村の東に敗走す。修理此勢に乘じて、基家の旗本に突掛り、一もみに切崩さんと自馬上に槍を取て、無二無三に殺倒す。基家于一時十七歳、力量衆に超え、智謀父祖に劣らず。圓形の備を箕の手に作り取籠て討んとす。元常少も猶豫せず、兵を下知して相當り、兩方の手負討死麻を亂すに異らず。長船・延原取て返し横合に突掛れば、此勢に切たてられて修理が兵、後より亂れて敗北すれども、元常は只二十四騎計り、眞圓に成て取て返し〳〵、追敵をあしらひて段の原に引かへす。基家は急に追はず備を堅めて、靜に太鼓をうち旗本を進めらる。

爰に、赤阪郡和田の城主和田伊織は、行年十九歳、容貌美にして心も剛なる男なるが、穭所と雲龍の約ありとかや。此日の軍を聞て五千騎計にて馳せつき、河原に馬印を押立て控へしが、元常が敗軍を見て急に進んで、宇喜多勢を切崩す。然れども基家の旗本は早く迫留りければ、和田も早々引取て、穭所と一つになる。日已に暮に及びしかば、其日の軍はやみにけり。其より二三日も、互に小迫合有りけれども、穭所・和田よく下知して戰ければ、中々城下までもよることあたはず、宇喜多勢も退屈して岡山へ引返す。

抑々、龍口の城といふは、一峰高く聳えて城郭雲に交り、大河麓に流れて北より西に廻り帶たり。北は險崖屏風を

立てたるが如く、東南の尾をば掘切たれば、たやすく落る城にあらず。直家つくゞ〳〵思はれけるは、此以後とても、兵をつかはして攻んには、人のみ損じて、利有るまじ。如何せんと、老中年寄相談有りしに、長船紀伊守密に申けるは、修理は武勇はよけれども、色を好むこと甚しく候。殊に美童を愛して常に召遣候よし承候間、何とぞ御譜代の子供の内美質なるを擇み、夫によく謀を教へ、手立を以て城中に入れ、たばかり討つ事、十にして五六は成間敷事にも非ず。才智かしこき兒にあらずば仕おふせがたからんと云て、頻に岡清三郎を見やりければ、直家とかうの返答もなく、外事を語て座を立給ふ。二三ヶ月も有て、直家岡清三郎を捕て押こめ置き、家老共にのたまひけるは、清三郎此間不義の密契有て、我前にて艶書を落したり。然れ共其相手誰と云名をしらず。拷問の上成敗せんとて、甚だ怒りたまふ故、何れも口を掛けて、彼に限り左様の義有るべき者にあらず。若艶書を越たる人有りとも、兎角云ひなして從ふまじ。左あれば艶書を越たりとて、彼が科に候まじ。又拷問したりともそれを云ふべき者にも非ず。彼十二三の比より見出されて、御籠愛に預り、今年十六歳、一度も御奉公のあやまち見え不申と云ひたれども、直家怒り猶やまず、拷問はともかくも、成敗は免すまじとて、奥に入りざまに岡豐前に來れと有ければ、豐前即奥に入る。直家のたまひけるは、汝清三郎をひそかに落し、何とぞ龍口へ入らしめよ。清三郎は此間我よくぞ聞かせたりとのたまへば、豐前かしこまつて立出る。扨明る日城外にて清三郎を誅せよとて、役人ども牢を明れば、清三郎は見えざりけり。牢番に尋ぬれば忙然として返答明かならず。是非なく申上ければ、以の外の恐りにて、牢番を成敗有けるとかや。豐前清三郎を盗み出し、龍の口の城の向牧石原に、豐前が遠き縁りの僧草庵を結て居たりしに、是を頼みて其庵に隱しおきて、便宜を求て修理に奉行させんとて窺ひける。或時、修理は城下の流に小船を泛め、網を引かせて居れしを、清三郎是を見て能き便なりと思て、尺八を持ち小藪のかげに居て、音もあやに吹きならす。河瀬に響て樓のごとくにして、然もたへず、愁るがごとく訴ふがごとく心細くぞ聞えける。修理は本より尺八を好み常に弄びし人なれば、自竹の奇なるを求て是をひらき、身を放さぬほどの數奇なれば、此曲に耳を傾て不審に思ひ、人を遣して見せられしに、其人歸て申けるは、年のほど十五六の美き少人の、藪陰にて尺八を吹き候と申す。元常殊にいぶかしくて、其邊外にあ

やしき者も見えざりしかと有ければ、使の云く、其(某カ)も不審に存じ、僅なる民家にて候へば悉くまはり見候に、更に不審の義無之と申しければ、心得ぬ事かなとて、劔術の師加藤十藏小兒姓早川左門水野織之介、彼是六七人小舟に乘て川向に行き窺ひ見れども、是を知らず吹き居たり。修理先づ舟より上り其樣を見られしに、年の程十五六にして白き帷子に大小をさしたり。いかさま只人にあらずと思て、何れも近づき見れば、緣髮紅顏いはん方なく、天上の仙童髮にあま降りしか、姑射の神人のあらはれたるか。さらに此世の人とも思はれずと、そぞろに嘆きあひて、覺えず歩みよりしかば、清三郎此體を見て驚きたるやうにて、尺八を收め立たんとするを、修理詞をかけて引き留め、さるにても御邊は如何なる人にて侍るぞや。かゝる處にあるべき方とは見請け候はず。又尺八の曲調もかく委くおはするぞや。某は龍口の城主也。殊に尺八を好て弄べども、いまだかゝる奇音を不聞と問はれければ、清三郎手をつきて、扨は修理公にてましますかや、某は御敵直家に仕へ申し、岡清三郎と申者にて候。奸曲の者の言葉に付て、無實の科を某に取かけ、已に誅せらるゝに極りしを、家老共不便を加へひそかに落し侍れども、猶よる方なく迷ひ居たるを、又人々の憐んで此所の草庵にかくし置き、其後、何方へも行衞をさだめよと有りしに付、四五日の間髮にしのび居候。洞簫は直家の猶子基家堪能に候間、少し曲調を覺え候也。今將公に見付られ參らせ、恥かしき身の上をあからさまに申上ぬる上は、敵の中より迷ひ來る者なれば御哀みも候まじ。とく〳〵いか樣にも御計ひ被下、なき跡を賴奉ると玉眸に泪をふくむ有樣、雨を帶びたる梨花のごとし。修理は、忽勇氣くじけて、哀れ此者をつれかへらんと思はれければ、十藏をかたへにまねきさゝやかれけるは、敵中の人なれども、かゝるやんごとなきお人の、さまでの事は有るまじ。若此所に捨置きなば、重ていかなる憂目にかあはん。城内につれ歸り樣子を見屆け、もし野心あるならば汝が手に掛けて失ふべく、左なくばはごくみてつかはすべしと有りければ、いかゞ有るべきや、我等は同心になく候と云ひければ、修理押かへして、吾に任せよ用心も人によるべし。直家さへ恐るゝにたらず。たとひ此者間者なり共、我又彼に付て謀をなさん。況や幼年のいかでか吾をたばからんと、理を非にまげて云ひ消し、又、清三郎に申されけるは、汝が有さま不審なきにもあらざれども、童形の身いかでか野心有るべきと思ひ、城中につれかへる間、吾に從ひ

來るべしと有りしかば、御情のほどの忝なさ申上べき樣なく候、とても此身は萍のよるべをたのむ事に候へば、仰にしたがひ參らせんと告げながら、庵主にいとま乞ひ申したし、御待被ㇾ下べきやといへば、其段は心に任すべしとて、侍を一人さしそへ庵室にゆかしめ、右のわけをつぶさに申、いとまを乞ふて立出で、それより小舟に乘せて歸城有りける。然れども此者の一言猶うたがはしければ、岡山に間者をつかはして事の樣を聞かしむるに、果して其事實なれば疑を晴して、其後は水野・早川なども寢席に近づけず。清三郎を寵愛して酒色に軍事を怠るのみならず。清三郎と只二人、城山の北の亭に上て醉臥せらるゝ事度々也。老臣諫れども更に用ひず。加藤十藏あまりに見兼て、和田に立越え伊織にまみえて、右の次第を語り、此體にては家運の末と存ずる間、御異見賴入るのよし餘儀なく訴へければ、伊織甚だ驚きて、いそぎ龍の口へ赴き修理に逢ひ申されければ、例の清三郎側に在り。伊織申されけるは、密談の仔細有て罷越候間、人を拂はれ候へと有りしかば、清三郎座を立ちぬ。伊織色を正して樣々異見時を移すといへども、更に同心の體もなく、元常笑て申されけるは、凡古より敵味方に來り降る事、珍ら敷事に非ず。さりとて其者をうたがはゞ大功成就すべからず。いまだ若輩の御邊などの知玉ふ事にあらず。彼者野心少も無ㇾ之候段は、某こそ能く存候へ。若某が運つきて人にたばかられ申ならば、夫は百年の壽も今日の死も、更にかはる事なき也。とかく若き人々の仔細らしく物なのたまひぞ。今更御異見に預るまじと、すげもなき挨拶に、伊織忽然と怒て、御邊此城に運をひらく事あたはじ。近日此城に屍を訪はん。交情の捨てがたければこそかくはいへと、座敷を蹴立て立歸るに、元常は見向もせず座し居たり。伊織座を立てひそかに老臣山口與一を呼び、とかく例の持病良藥もとゞかぬと見へたり。御邊よくはからへと云て、和田にかへりぬ。然るに六月半の比なれば、火雲焰々として天を燒き、山岳の翠乾て、城中紅爐の中に坐するが如くなれば、元常暑氣を避けんとて、例の如く清三郎只一人召具して、件の北樓に上り、流を見おろし盃を傾けければ、薰風洒々と袂に入て、河瀨の音耳を洗ひ、牟佐の渡頭、金山の絶頂、皆是れ吾一幅の丹青なりとて、かはる〴〵尺八を弄せらる。清三郎は害心をさとられじと、心を盡して仕へたり。此日も已に數盃に醉て、覺えず清三郎が膝を枕とし、睡眠時を移しけるに、清三郎爰こそよきひまなれば、首取てのがれ去るべし。よし

や仕損じて、忽爰にて討たるゝとも、是ほどの暇隙は又有るまじと思へば、しきりに胸とゞろきて居たりしが、いかゝ様此間の深情を思へば、いかにしても此人をやみ〳〵と討たんこと人情に背きたり。よしや目をさまさせ、此事あからさまに告げ知せ、此人の手にかゝらんかと思ひしが、いや〳〵直家公の爲身を捨て此城中にたばかり入り、かくまで仕よせたる忠義を、私の恩にかへん事武士の道に非らずと思ひきはめ、修理の脇指の側に有りしを引よせて、心中に念佛して首を打落しけるこそ哀れなれ。此事更に知るべなければ、袴をぬぎて首を包み、險阻のつゞら折を北の麓へ落行きしが、小兒姓早川左門亭の邊に來りしが、足音あらゝかに亭の階子を下る音して、清三郎が山を走り下る後かげを見ければ、急ぎ亭に登りて見るに、主人の屍朱に染みたり。こはいかにと驚きて、清三郎め殿をきりたるぞと、二三聲呼はり捨て、清三郎が跡を付て追行きける。清三郎は一さんに麓に逃下りあたりを見廻すに、城主の常に逍遙せらるゝ小船の有りけるを幸と思ひ、首を船に投入て其身も乘らんする處へ、左門走り來り、いづく迄逃るぞとて討てかゝる。清三郎ふりかへりてぬき合せ、ふみ込で打付れば、左門が鬢のはづれより左の肩さきへ切さげたり。清三郎切先はずれに肩先を切られしかども、二ノ太刀にて左門が眉門に切付けしかば、たゝみ重て切りたをす。可憐左門生年十五にて、主君の爲に討れける。城中にはおくればせに聞付け〳〵追々にはせ下る內に、件の船に棹さして向の岸に逃行きしかば、城兵は上の瀨の地藏岩の邊につなぎ置きたる二三艘の小船に取乘て、おせどもさせども大勢にて、舟の足入たれば一寸も動かず。とかくする內に清三郎は、牧石原に落行て庵主に告しらせ、岡山へやす〳〵とのがれ歸りける。さて龍口には兵ども齒をくひしばり、腹たつれども今はせん方なく、とかく此城を枕として、直家よせきたらば、切死せんと云もあり。又和田へ注進して伊織殿を大將とし、さかよせに岡山へ押よせ、無二の一戰して討死せんと云も有ければ、山口與一申けるは、伊織殿を招くとも、自分の城を打すてゝ爰にて無分別の合戰あらんか、又此一戰の人數にて岡山に寄せたりとも、直家のほこさきに當る事叶ふまじ。籠城堅固に持こたへ、隨分爰にて防戰し、かなはぬ時腹きらんこそ本意ならめと云ひければ、何れも此義に同じ、先づ出陣をば相止めける。さるほどに、直家は清三郎が修理に愛せらるゝを聞き玉ひ、若輩の身として修理を計らん事、心元な

きこと十が八九也。然れども生きてかへらん事、決して有るまじければ、すまじき謀を仕たりと、甚だ不便に思はれける。かゝる處に或日の夜半前、ひそかに御枕本を音づるゝ者あり。誰ぞと尋ねたまへば、岡豐前清三郎を召連れ、修理が首を持來りければ、直家大に驚き給ひ、且悦び且あやしみ、いか成る術を以てのがれ歸りしぞとのたまへば、有し事ども委く申上る。直家のたまひけるは、若年の汝、其才覺はひとへに弓矢神の我に利運を與へ玉ふ物なり。武勇、おひさき賴もしき若者なりとて、賞功淺からず。明る早朝に前髪を取らしめ岡鄕助とぞ名乘らせらる。扨龍口の城を可レ攻由にて、長船●戸川●延原●花房●岡など各諸隊を押出し、旭川に添て押寄る。此由龍口へ聞えしかば、始め戰はんと云ひける義勢も、主人なければ誰下知する分ちもなく、兵氣紛々と離れ、とかく籠城叶ひがたく、我も〳〵と落行く者多ければ、山口與一せん方なく、家老の身として士卒とゝもに落さらん（行かか）も面目なしとて、三ノ曲輪にて切腹す。義を共にする者三四人、殘る者共、悉く落ち失ぬ。宇喜多勢空城に入て、矢倉に火をかけ燒拂ふ。是に氣を失て、和田の城にも士卒大半落散りければ、伊織は時を待て修理が吊合戰をすべしとて、先づ城を明けて金川に立退き、松田一族と一つになりて、しばらく時節をうかゞひける。

或記に**穐**所修理を西條治部と云へり。又俚俗に宰相殿と云ふ。和田村の庄官何某が家に此書有り。元祿元の春此書を求て閲す。古本の文辭甚だ卑陋にして、其上字義も誤りたれば、記寫の序に潤色して此書を正す。外に段ノ原里老の傳ありといへども、疑しき事有る故に、是を除く。又或書に信濃ひそかに元常を討てのがる。城兵鎗を以て是を追ふ。信濃河に飛入り水底をくゞり牧石原に上る。直家の伏兵兼て牧石原にあり。此故に、敵を追崩し信濃を引つゝみ、岡山に歸ると云說あり。別に龍口の城圖あり。尤堅固の山城也。今は本丸に八幡宮あり。此の麓に早川左門が墓ありと云ふ。修理并山口與一等墓所不レ知。

宇喜多與太郎基家、竹田河原合戰の時、旗本の備を崩して修理を追はんと有りしを、直家より後見として付置きたる、國富源右衞門宍甘太郎兵衞兩人、基家の馬の左右に添て備を崩さず。此故に旗本の勝を得たりと古老物語なり。

或人曰、岡鄕介乞食の老女を、おのが母也とて養置き、龍口に入て後母をも呼取たき由を云て、彼老女を城中に呼入れ養ひしか

ば、修理彌々誠なりと思ひ、心安く思ひつかはれしと云へり。本文の如くば、郷介いまだ幼年也。是程の智術あるべき事にもあらず。若岡豐前などが計らひて得させたるか。

此本文に長船紀伊守と有るは、長船越中にて有るべきか、時代少し相違あらんか。(紀伊は越中の子也。)

與太郎基家、此合戰の時十六歳ならんかと云ふ說あり。

上道郡中島落城は、龍口落城と同日なりとぞ、直家龍口歸陣の勢を以て、中島の城を圍む。城主中島大炊無勢にて防戰叶はず、榎の大木のうつろに隱れ居たるを、さがし出して討之と云へり。其子孫今同所にあり。城跡平地となりて今は畠也。其時の榎今にあり。本口周り三丈計りあり。

明和元甲申年中冬寫之。

龍ノ口落城記終